

## SMGLレポート 2303-その1

※ ジャンルごとに、毎回テーマを変えてご案内します。

### 【統計】

#### ①「坂の上の雲」の中は霧？

日本の大学進学率は60年安保闘争当方で、ようやく10%の壁を越える状態でしたが、遑って、秋山好古・真之兄弟が活躍した日露戦争の頃ともなると、それは僅か2%に過ぎませんでした。大卒者が「学士様」として尊敬され、有難がられた理由が、ここに 있습니다。100人に一人か二人の文字通りの選良が、「坂の上の雲」＝欧米列強＝に迫り、その仲間入りを果たすべく、後進国家日本の命運を担い、全能を傾けて奔走した時代ーと云って良いのかも知れません。それから一世紀。2人に1人以上ー57%超ーが進学するご時世となった今、学士は「ナベ底景気」といわれた昭和28年ー朝鮮戦争の特需が終わった反動で生じた不景気ーを遥かに凌ぐ勢いで、職にも就けないまま社会にあふれ出てきています。

名実共に先進国のトップランナーとしての一角を占めながら、こうした事態への対応もままならず迷走を続ける今日の日本の姿は、手詰まり状態そのものに映りますが、それについて、次のような見方がありますのでご紹介いたします。ー上空に浮かぶ雲を目指して坂を駆け上り、遂にその目的を果たした筈が、捉えてみれば「雲の中は霧」で、視界も開けず、方向性も定まらない。雲＝近代工業国家モデル＝を追う時代は既に終わっているのに、その先＝まだモデルの定まっていない雲の上の世界＝に首を出そうとしないから周りが見えなくなるのであり、どの国も皆同じ状況にあるが、様々な課題＝環境汚染、少子・高齢化、エネルギー効率やリサイクル問題等々＝に直面し、経験知を積み上げ、あるいはそれを克服してきた日本だけが、他に先駆けて「次世代モデル＝課題先進国モデル像」を示すアドバンテージを有するー（前東大総長／現三菱総研理事長「小宮山宏氏」）

中国をはじめとするアジアの新興国に押し捲られ、国内需要は飽和し、資源も輸入に頼らざるを得ない閉塞状況にあるかのように見える日本ですが、氏によれば、それは統計的裏づけと展望のない、根拠なき悲観論に過ぎないそうです。たとえば日の出の勢いの中国ですが、かの国は早くも2014年に生産年齢人口(15ー64才)が減少に転じ、従来型の成長モデルは相当の修正を迫られることになりそうですし、その中国の労働供給を当てにしてきた米国なども、影響を受けるのは必至の情勢とされています。一方日本は、既に少子化の洗礼を受けて様々な角度から対策を講じてきており、又人工物(車や機械装置、建築物等)もほぼ飽和状態に達していることにより、却って購買需要の計数化(ex:08年現在の総住宅数5800万戸、内空家数800万戸、差し引き5000万戸を50年サイクルで割ると年100万戸の建設需要が見込まれる)や金属資源自給率の改善(人工物のスクラップ化は平均40年。これが順次排出されるという事は、国内に金属資源があるのと同じで、自給率向上に直結すると同時に、鉱石・鉱物の状態で船賃をかけて輸入し、溶かして取り出すのとスクラップ還元法では、エネルギー比率で鉄27倍、アルミ83倍の効率差が生じる。金の場合も採掘式ではトン当たり5g、携帯電話からはトン当たり250g＝都市鉱山)など、不足するところを知恵と工夫で補ってきた「先進的なモノづくり力」と高度の「文化力」を活かせる状況にあり、今こそ世界をリードしてゆく立場にあると云って良いーということでした。時流に流されず、日本の真の実力を見直すようにーとの、力強いメッセージが込められているように思われました。